シェイクスピアのソネットを使った英文学教育
――「英米文学入門」の教材として――

糸　多　郁　子

Ⅰ．はじめに

現代は、書籍・テレビ・映画・インターネットなどの様々な手段を通じて海外に関する情報を簡単に得ることができ、また海外に実際に行って異文化を体験することも昔よりははるかに容易になっている。しかしそのような時代であっても、大学に進学したばかりの大学生の大半は、英米――現在では英語圏と言うべきかもしれない――の文学や文化についての知識はほとんど持ち合わせていない。英語教育や国際理解教育に特別に力を入れている高校以外のほとんどの高校においては、リーディング・ライティング・リスニング・スピーキングといった英語のスキルに関する指導に時間がかかり、英語圏の文学や文化に関する指導に時間を割く余裕がないからであろう。しかし、大学で「英語」の教職課程を履修し英語教員を目指すのであれば、中学や高校の現場で文学や文化を教える時間が取れるかどうかに関わらず、英語という言語をより深く理解した上で指導するためにそれらの知識を学んでおく必要があることは論を待たない。

本学では、「英語」の教職課程を履修する学生たちが英語圏の文学や文化の知識を得るための必修科目として、「英米文学入門」という科目が設定されている。この科目は、筆者ともう１名の教員がそれぞれ春学期と秋学期に開講しており、教える内容は個々の教員に任されている。30回の講義という限られた時間内で英語圏の文学と文化を教えるにはどのような文学作品を用いるべきか、というのは常に頭を悩ませる問題であった。

英米文学――これも最近は英語文学と呼ぶようになってきている――を学ぶというとまずウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）のことが頭に浮かぶ人は多い。確かに、現代でも大学で英語文学を専攻する者は、ほぼ全員シェイクスピアの戯曲について学んでいるだろう。筆者が担当する「英米文学入門」でも、『オセロ』（*Othello*）を中心にした彼の戯曲に関する講義を行っている。その一方、戯曲があまりにも有名なためか、彼の詩が大学の授業で取り上げられることは少ないように思われる。しかし、３冊あるシェイクスピアの詩集のうち『ソネット集』は、一篇の詩が短いため読みやすく、また今日的な問題も含んでおり、英語文学における様々な問題に対して学生に関心をもたせることができるテクストなのではないかと考えられる。

そこで本稿では、シェイクスピアの『ソネット集』、その中でも特に18番を取り上げ、

それを「英米文学入門」で英詩を教える際の教材として使用することにおける様々なメリットについて考えてみたい。

Ⅱ.『ソネット集』の成立と全体的構成

シェイクスピアのソネットについて細かく論じる前に、まず『ソネット集』の成立や内容について簡単にまとめておきたい。この『ソネット集』(*Sonnets*) は、『ヴィーナスとアドニス』(*Venus and Adonis*, 1593)、『ルクリースの陵辱』(*The Rape of Lucrece,* 1594) に続いて1609年に出版された、シェイクスピアの3冊目の詩集である。しかし、この詩集はトーマス・ソープ (Thomas Thorpe) というロンドンの出版業者が出版しただけで、シェイクスピア自身の許可を得て出版したのかどうかも怪しく、執筆年代もはっきりしていない。1598年以前から書き始められていることはほぼ確実であるが、1591年から1600年ごろにかけて起きた連作ソネットの創作の流行は1609年には終わっており[1]、特に1590年代の前半に多く書かれたのではないかという説が有力であるようだ。その理由は、1593年の2月から年末までの期間、ペストの流行により劇場が閉鎖された[2]ため、劇作より詩作に関心が向いたのであろう (その頃に他の2冊の詩集も出版されている) ということと、登場人物がソネットをうたう場面がある『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1593) のような戯曲が書かれた時期だということである[3]。

次に内容であるが、『ソネット集』は154篇のソネットから成っており、連作ソネットとしては内容的にまとまりが薄いということも特徴のひとつとされてきた[4]。各篇に1番から154番の番号がふられているが、これは創作の順番でもなく、内容的なつながりを示す順番でもない。しかし、内容的には大きく2つに分けることができ、1番から126番がある美しい青年への愛をうたうもの、127番から152番がダーク・レディ (dark lady) と呼ばれる女性に向けてうたっているものである。そして、詩人が130番で「私の恋人 (my love)」と言っているダーク・レディは、126番までうたわれる美しい青年とも恋愛関係になっており、三者の間に三角関係が存在していることが示唆されている。その三角関係によって、126番までのソネットとそれ以降のソネットが内容的に関係付けられ、ある一貫性をもたされている。

本稿で主にとりあげる18番は、美しい青年への愛をうたうソネットのひとつであり、またこの『ソネット集』の中でも一番有名なものである。次章では、18番の形式に注目し、それを授業にどのように活かすことができるかを考えてみたい。

Ⅲ. ソネット形式

『ソネット集』は文字通りソネットを集めた詩集であるが、ではそのソネットという形式がどのようなものであるのかについてまず確認しておきたい。ソネットとは14行詩のこ

とで、イタリアのペトラルカによって14世紀に完成された詩形である。それを16世紀になって、サー・トーマス・ワイアット（Sir Thomas Wyatt）が英文学に持ち込んだのである。ワイアットはイタリアでの形式をそのまま使用していたが、その後サレー伯（Henry Howard, Earl of Surrey）によってより英語に適した形式が作られた。前者はペトラルカ形式またはイタリア形式と呼ばれ、後者はシェイクスピアがソネットを作る際に使用した形式であることから、シェイクスピア形式またはイギリス形式と呼ばれている。

この二つの形式の違いは、脚韻の踏み方にある。脚韻を踏んでいるというのは、詩の中のある一行の最後の強勢が置かれる母音とそれに続くすべての母音および子音が、他の一行のそれらと同じである場合である[5]。ペトラルカ形式では、14行が前半の8行連句（Octave）と後半の6行連句（Sestet）に分けられており、さらに前半はabbaという韻の踏み方をする4行連句（Quatrain）が2つから成り、後半はcdcとdcd、またはcdeが2回、またはcddとceeなどの3行連句（Tercet）2つから成っている。一方、シェイクスピア形式は、3つの4行連句の後に2行の対句（Couplet）が付く形で、4行連句の部分はそれぞれabab、cdcd、efefと一行おきに韻を踏み、対句では同じ韻が2行続けられる。これは、図1のようにまとめられる[6]。

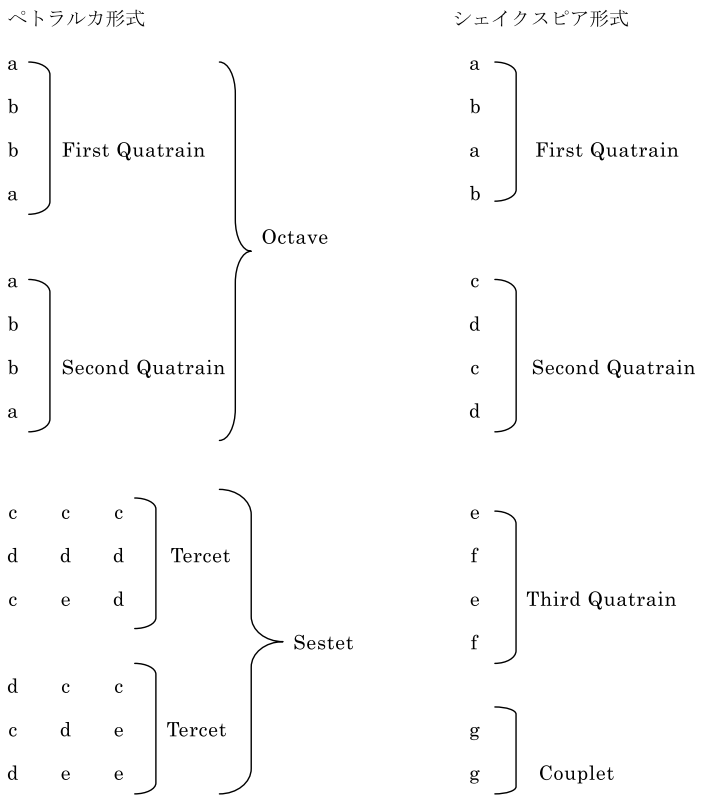


図1．ソネットの脚韻

上記のような形式は詩の内容とも関係しており、ペトラルカ形式では後半６行で新たな方向性が示されることが多い。つまり、前半８行であるテーマが提出され、後半６行でそれが解決されるといったものである。それに対し、シェイクスピア形式では最後の対句部分で結論的なものが提示されて締められるというパターンが多いが、後半６行で新たな展開があるペトラルカ形式の影響が残っているためか、４つ目の４行連句が始まる９行目から論理の転換、強調、内省などが示されることもある[7]。

詩の形式において、脚韻に加えて重要なもうひとつの要素はリズム（韻律）である。韻律とは、詩の各行が決まった数の音節から成っており、しかもそこに決まった数の強弱の組み合わせが入っていることで生み出されるものである。韻律にはさまざまなパターンがあるが、英詩において最も一般的な韻律は弱強５歩格（iambic pentameter）と呼ばれるもので、詩の１行の中に「弱・強」（強勢のある音節とない音節）の組み合わせが５回繰り返される。シェイクスピアのソネットも、この弱強５歩格で書かれている。

ここまでシェイクスピアのソネットの形式についてまとめてきたが、次に実際に18番のソネットを例として見てみたい。

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date:
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimmed;
And every fair from fair sometime declines,
By chance, or nature's changing course, untrimmed:
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou ow'st,
Nor shall death brag thou wander'st in his shade
When in eternal lines to time thou grow'st:
  So long as men can breathe or eyes can see,
  So long lives this, and this gives life to thee. [8]

あなたをなにかにたとえるとしたら夏の一日でしょうか？
だがあなたはもっと美しく、もっとおだやかです。
手荒な風が五月の蕾を揺さぶったりして
夏のいのちはあまりにも短くはかないのです。
ときには太陽の眼差しが熱すぎることもある、
ときにはその黄金の顔に雲がかかることもある、

そして偶然、あるいは自然のなりゆきによって、
美しいものはすべてその美しさを奪われていくのです。
だがあなたの永遠の夏は色あせることもなく、
あなたに宿る美しさは失われることもなく、
死神に「死の影を歩む」と言われることもないでしょう、
あなたが永遠の詩の中で「時」と合体しさえすれば。
　人々が息をするかぎり、その目が見うるかぎり、
　この詩は生きてあなたにいのちを与え続けるでしょう[9]。

上述のように、シェイクスピア形式のソネットではabab cdcd efef ggという韻の踏み方をするので、この18番でも１行目（day）と３行目（May）、２行目（temperate）と４行目（date）、５行目（shines）と７行目（declines）、６行目（dimmed）と８行目（untrimmed）、９行目（fade）と11行目（shade）、10行目（ow'st）と12行目（grow'st）、そして13行目（see）と14行目（thee）がそれぞれ韻を踏んでいる（不完全韻を含む）。また、この18番は若い男性の美しさを夏の日の美しさより勝っていると讃えているものだが、最後の２行「人が息をする限り目が見える限り　この詩は生き続け、あなたに命を与える」によって、若い男性の美しさが勝るのは詩に書かれることによって永遠性を獲得するからだ、という結論めいたものが出されている。このように最後の対句が締めに使われているが、９行目はButという意味の強い接続詞から始めて、ここから若い男性の美の永遠性について語り始めているので、ペトラルカ形式と同様、９行目から流れの転換が起きていることも見逃せない。

さらに、韻律についても検討してみると、例えば第一行目はShall, I, compare（２音節）, thee, to, a, summer's（２音節）, day と全部で10音節から成っている。弱強５歩格に関しては、toという前置詞に強勢が置かれてしまうのは若干不自然ではあるものの、ほぼ弱強５歩格になっていると言えよう。その他の行についての検討はここでは省略するが、多少ずれるところはあっても、弱強５歩格のリズムがほとんどすべての行にわたって成立している。

シェイクスピアのソネットは、14行しかないので全体を見渡しやすく、授業の短い時間でも取り上げやすい。また、英詩で最も一般的な弱強５歩格を使用しており、ペトラルカ形式よりも単純でわかりやすいシェイクスピア形式で韻を踏んでいるので、韻律や脚韻といった詩の基本を勉強するにも非常にいい教材となりうるのである。

Ⅳ．ソネットの内容

１．暦、気候、ルネサンス精神

前章ではシェイクスピアのソネットの形式面について論じたが、本章では内容について論じてみたい。内容面においても、ソネットを使って学生に教えられることは多く存在す

る。先に挙げた18番を例にとって、そこから教えられるいくつの事項を取り上げてみよう。まず暦の問題である。18番では５月を夏と言っているが、「なぜ５月なのに夏なのか」というのは、18番を「英米文学入門」で取り上げた時に学生から非常によく出される疑問のひとつである。この時代の暦は現代の暦とは異なり、５月は夏の月であった。シェイクスピアの時代にはユリウス暦という太陽暦が使われており、1752年以降イギリスでも使われるようになったグレゴリウス暦と比べると、ほぼ10日のずれがあったのである[10]。時代が違えば暦も違い、それによって季節の切れ目も変わることを教えることができる。

また、若者を夏の一日にたとえているのは、夏は美しい季節であるという前提があるからだが、そこからイギリスの気候について説明することもできるだろう。イギリスの夏は日本と違い、気温の高い日が非常に少なく、降水量が年間で日本の約３分の１であるため湿度が低く過ごしやすい上、特に夏至の頃は夜の９時過ぎまで明るいほど日が長く、花々が咲き乱れる夢のような時期なのである。このような説明は、イギリス文学に登場する自然描写を理解する上での基礎知識となるだけではない。日本語に置き換えればsummerは 夏、May は５月となってしまうが、それらの語が指す対象や語がもつイメージは、実はその語が使用される時代や文化というコンテクストによってかなり異なっているのだということを学生に気づかせ、歴史と言語、社会と言語といった問題を考えさせることができるのである。

さらに、この18番の中に人文主義的なルネサンス精神を見ることも可能であろう。イングランドにおけるルネサンス期は、チューダー王朝期にほぼ重なるとされる。ルネサンスは、古代ギリシャ・ローマの学芸復興と、中世キリスト教の束縛から逃れて人間中心の生き方を肯定しようとする人間性回復を主張する運動であるが、この詩においても人間性回復というテーマが扱われていると言うことはできる。というのは、11行目で「死神に「死の影を歩む」と言われることもない」と述べられているが、いつかは必ず死ななければならない人間が、死なずに永遠性を獲得しようとすることは、永遠の存在である神に対する挑戦に他ならないからである。

エリザベス朝の文学には、そのような神に対する挑戦がしばしば見られる。シェイクスピアの『マクベス』（*Macbeth*）などの悲劇の多くや、シェイクスピアの少し前に活躍したクリストファー・マーロウ（Christopher Marlowe）の悲劇である『タンバレン大王』（*Tamburlaine the Great*）、『フォースタス博士』、（*Doctor Faustus*）、『マルタ島のユダヤ人』（*The Jew of Malta*）などにおいて、キリスト教的価値観を否定し、金銭欲や権力欲にまみれて世俗的頂点を目指す、神をも恐れぬ主人公が登場する。ただし、ここで重要なのは、それらの主人公たちもどんなに世俗的成功を収めたところで結局は死を免れることはできず、最後には神に歯向かった罰とも思われるあっけない死を迎えるという点である。つまり、人間は神を否定したり乗り越えたりすることはできず、神への挑戦は最終的に失敗に終わらざるをえない、という考え方が提示されているのである。

ソネット18番においても、青年の美しさを詩人が詩の中に残すことによって、若者が永

遠性を獲得するといった言い方がされている。が、同時に、青年より美しさが劣るとされている夏の一日の描写――夏は短いことや、美しいものがすべて色あせていくことなど――を見ると、それが青年の姿とおのずと重ね合わせられ、実際には青年も時を待たずして老い、死んでいくのだということが示唆されているのである。つまり、人間が永遠の存在となろうとすることで神に挑戦しても、それは決して勝つことのない戦いであるという、ルネサンス期の特徴的な精神性が18番には見られるのであり、ルネサンス期の文学の特徴を教える上でも良い教材となりえるだろう。

2．詩人・青年・ダークレディの三角関係

次に、この18番を語る上で避けて通れないと思われるのが、この詩にみられる同性愛的要素である。Ⅱ章で述べたように、シェイクスピアの『ソネット集』では詩人、美しい青年、ダーク・レディの三角関係が描かれているので、ソネット18番は青年に対する愛を詩人が語っている詩だと考えられる。

しかし、そのような知識を与える前にまず学生たちにこの詩を読ませると、ほとんどの学生が「詩人が美しい女性への愛を語っている詩」だととらえてしまうのだ。それも無理はないだろう。なぜなら、この詩が捧げられている対象は、「あなた」（Thou）としか書かれておらず、特に性別を示すような表現も見当たらないからである。また、詩人についても、「私」（I）としか表現されていないので、性別はわからない。日本語には「俺」「僕」「私」「あなた」「おまえ」など多彩な１人称・２人称があるので、日本語で書かれていればある程度性別を推測することができるかもしれないが、性別によって人称が変わらないのは英語の大きな特徴のひとつである。だが、学生たちはシェイクスピアが書いた詩だということは知っているので、男性が書いているのだから“I”は男性、そしてその男性が愛を捧げるなら当然相手は女性、と考えるのだ。本来、作家は男性でも、作品中の“I”は自分とは違った架空の存在として作る場合もありえるので、男性とは限らないのであるが、たとえ男性だとしても、その恋愛対象は当然女性であると信じて疑わないことは、いまだに日本社会で異性愛中心主義が根強いことを示していると思われる。そのため、これまで授業で「これは男性である詩人が青年に対して愛を語っている詩だ」と種明かしをすると、非常に驚くと同時に嫌悪感を示す学生もあった。ただし、現在はLGBTと呼ばれる、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーといった性的少数者に対する理解も進みつつあるので、学生たちに以前ほどの抵抗感はないようである。

実はこの同性愛問題は、歴史上長らくシェイクスピア像に影響を与える大きな問題であった。キリスト教では基本的に同性愛は禁じられているのだから、もしシェイクスピアが同性愛を賛美しているのであれば、彼自身も同性愛者なのではないかという疑いが生まれ、その作品の価値まで貶められることになってしまう。そのため、『ソネット集』の出版の歴史を見ると、シェイクスピアに同性愛者の疑いがかけられないようにする工作がなされていたことがわかる。1640年に出たジョン・ベンソン（John Benson）版が18世紀後

半になるまで複製され続けていたのだが、その版では、もとのソネットにかなり手が入れられていたのだ。具体的には、ソネットの順番を抜本的に変えてしまったり、個々のソネットにタイトルをつけたり、いくつかのソネットをつなげて長い詩にしたり、恋愛対象を男性ではなく女性にするためにいくつかの代名詞を変えたり、現代ではシェイクスピアの作品とはみなされない他の多くの詩を加えたり、といったことが行われた[11]。1780年にエドモンド・マローン（Edmond Malone）が、1609年に出された四つ折り版（1609 quarto）に沿った新しい版を出版したことにより、『ソネット集』は現在のような形になった。つまり、マローンが出版するまでは、現在とはまったく異なる『ソネット集』、そしてまったく異なるシェイクスピア像が作られていたということになる。しかも、その後にマローンが出した1821年版には、ソネットの紹介文をジョン・ボズウェル・ジュニア（John Boswell Jr）という人物が書いており、その最後には以下のようなことが書かれていた。

1．ルネサンス期には、男性同士の友情は、恋愛の言葉遣いを使って表現された。
2．シェイクスピアは、その青年を愛してはいなかった。なぜなら青年は彼のパトロンだからで、彼の支援を受けるためにそれらの詩が書かれたのだ。
3．それらの詩は、実は愛や友情についてのものではない。なぜならソネットというのは慣例的なものであるからだ。
4．それらのソネットは寄せ集めでしかなく、詩人自身や誰か個人について書いているのではなく、単に彼の空想の放出でしかないのだ[12]。

上記の2番で青年がシェイクスピアのパトロンだと言っているのは、ソネット中の美しい青年とはシェイクスピアのパトロンであったサウサンプトン伯（3rd Earl of Southampton、本名はHenry Wriothesley）という青年貴族を指すのではないか、という説があるからである[13]。このような但し書きからは、マローン版によって本来のシェイクスピア像が回復されるとシェイクスピアに同性愛者だというレッテルが貼られてしまうのではないかという極度の恐れと、それを何とか回避しようとする必死の努力が見て取れる。

このように論じたからといって、「シェイクスピアは本当は同性愛者だったのだ」と言いたいわけではない。実際に同性愛者だったのか、そのような願望だけはあったのか、または完全に異性愛者で文学として書いているだけなのかについては、シェイクスピアの人生に関する資料がほとんど残っていないこともあって特定不可能であろうし、そのこと自体にはそれほど重要性はないだろう。また、同性愛の是非についてここで論じるつもりもない。それよりも、シェイクスピアのソネットによって、いかに異性愛が特権化され同性愛者が異端扱いされてきたか、そして私たち自身もいかに無自覚に同性愛を「不自然で異常なもの」としてきたかを学生に気づかせることができ、さらにそのような権力構造が文学テクストそのものや作家像にも影響を与えてきたのだということを考えさせることがで

きる、という点の方が重要だと思われる。作家が書いた作品は、出版という過程で社会の権力構造の影響を受けざるをえず、その中で加工された結果のものが読者に提示されているのだ、ということは、文学に限らず出版された文章を読む場合に意識すべき事柄である。

では、『ソネット集』における詩人、美しい青年、ダーク・レディの三角関係は、異性愛と同性愛の問題としてだけ片付けてしまっていいのだろうか。それ以外に解釈の可能性はないのだろうか。それを考える上で鍵となると思われるのが、以下に挙げるソネット144番である。

Two loves I have, of comfort and despair,
Which, like two spirits, do suggest me still:
The better angel is a man right fair,
The worser spirit a woman coloured ill.
To win me soon to hell my female evil
Tempteth my better angel from my side,
And would corrupt my saint to be a devil,
Wooing his purity with her foul pride;
And whether that my angel be turned fiend
Suspect I may, yet not directly tell;
But being both from me both to each friend,
I guess one angel in another's hell.
Yet this shall I ne'er know, but live in doubt,
Till my bad angel fire my good one out. [14]

私には慰めになる人と絶望させる人と、二人の恋人がいる、
二人は守護霊のようにたえず私にささやきかける。
善霊のほうは色の白い実に美しい男であり、
悪霊のほうは色の黒いまことに不吉な女である。
女の悪霊はすぐにも私を地獄に引きずりこもうと、
男の善霊を誘惑して私のそばから引き離す、
そして淫靡な華麗さで彼の純潔をかき口説き、
私の聖者を悪魔にまで堕落させようとする。
そして私は天使が悪魔に変わったのではないかと
疑ってはいるのだが、はっきりしたことはわからないままである、
だが二人とも私から離れておたがいに仲よくなったのだから
多分男の天使は女の地獄にくわえこまれたのだろう。

私はこのことがわからないまま疑いながら生きるだろう、
悪霊が善霊に悪い病をうつして追い出すまでは[15]。

このソネットで、詩人には男性と女性の二人の恋人がいると語られており、その男性がソネット18番に登場した美しい青年、女性がダーク・レディであると思われるが、注目すべきは、その両者の描写である。3行目に“The better angel is a man right fair”とあり、4行目に“The worser spirit a woman coloured ill.”と書かれているが、男性の方が「(両者のうち)より良いほう」(the better)とされ、女性の方が「より悪いほう」(the worser)とされている。さらに、男性は“a man right fair”だというが、このfairは「美しい」という意味と「色白で金髪の」という意味をもつと同時に、「汚れのない、尊敬すべき」という精神的な意味ももつ。一方、女性は“a woman coloured ill”とされていて、ここの“coloured ill”は「不快な色=暗い色」という意味でダーク・レディの肌色を表すが、illには「道徳的に悪い」という意味もあり、ダーク・レディの精神性をも表現している。つまり、この2行だけを見ても、容姿だけでなく道徳性においても男性の方が優位にあるということが強調されているのだ。次に5行目と6行目では、男性は“my better angel”、女性は“my female evil”と表現されており、やはり女性には「悪」(evil)という言葉が使われている。そして7行目と8行目では、男性を「聖人」(saint)と呼び、彼の「純粋さ」(purity)を女性が「汚れたプライド」(foul pride)で口説き落とす、と表現している。また、7行目と9行目において、聖人のように立派なその男性が、女性のおかげで「悪魔」(devil, fiend)になってしまうと繰り返し書かれている。

このように、美しい青年の方が精神的に優れている(=善)で、ダーク・レディの方が堕落している(=悪)ということが繰り返し語られるのはなぜなのか。これは、浜名恵美氏も指摘するように、「中世の道徳劇でおなじみの、善と悪との間でおこる「魂の葛藤」(psychomachia)」の概念を利用して、二人を「善天使」と「堕天使」の鮮明なイメージで捉え」[16]ているからだと考えられる。道徳劇とは、15世紀半ばごろに演じられた、エリザベス朝演劇のさきがけとも言われる宗教劇で、様々な美徳や悪徳が擬人化されて登場し、道徳的な教訓を寓意的に伝えようとするものである。その中でも代表的なのが『エヴリマン』(*Everyman*)と呼ばれる劇で、死を目前にしたエヴリマンという主人公が善と悪を擬人化した人物たちの間で揺れ動き、最終的には善を選ぶという内容である。これを考えれば、ソネット144番の美しい青年は善が擬人化されたもの、ダーク・レディは悪が擬人化されたものと読め、詩人はその両者の間を揺れ動くエヴリマンに見えてくるのである。シェイクスピアの劇では、悲劇をはじめとして多くの劇の主人公たちがこのような善と悪の葛藤に苦しむ姿を見ることができる。

さらに、144番の美しい青年とダーク・レディの描写は、善と悪という二項対立だけでなく、もうひとつ別の二項対立を表している可能性があると思われる。それは、精神性と肉体性である。先に述べたように、青年に関しては肉体的な美しさと同時に、「尊敬すべ

き」「純粋さ」など精神的美しさが讃えられていた。それに対して、ダーク・レディには精神的に堕落しているという表現が繰り返されるのだが、そこに常に性的イメージがまとわりついていることに注意したい。ダーク・レディは青年を誘惑（tempteth）するのだが、これには当然、悪の道へ誘うというのと同時に性的に誘惑するという意味が含まれている。そして誘惑の結果、10行目にあるように“I guess one angel in another's hell.”となるのだが、これは「一方の天使はもう一方の棲家である地獄にいるのだと私は思う」という意味に一応はなる。青年はダーク・レディのところへ行ってしまった、または悪魔に取り込まれてしまった、ということになるのだが、実はもうひとつ意味がある。“hell”という語は、「女性器」の隠語として使われることがあり[17]、するとこの行は「私は二人がセックスをしていると思う」という意味になるのだ。さらに、最終行の“Till my bad angel fire my good one out.”は、表面上は「悪い天使が良い天使を地獄の火で追い出すまで」という意味になっているが、これも実は“fire”という語が「性病」のメタファーとして使われており、「性病をうつすまで」という意味が含まれているのである[18]。このように性的意味が隠されていることは、ダーク・レディが「悪」の象徴であると同時に「肉体性」の象徴ともなっていることを示唆する。

考えてみれば、ダーク・レディが「悪」と「肉体性」のシンボルとなっているのは当然のことであるのかもしれない。キリスト教的な価値観で言えば、性的なこと、つまり肉体性というのは卑しむべきことであり、悪となる。人間の「精神」は神に近い神聖な部分であるが、「肉体」、つまり性的欲求は動物的で汚れた受け入れがたい部分なのである。この精神性と肉体性の二項対立は、英文学全般にわたって非常によく見られるものであるが、シェイクスピア劇も例外ではない。「英米文学入門」で教材として使用している、*Othello*の中のイアーゴの以下のセリフにもそれは表れている。

> **IAGO:** Virtue? A fig. 'Tis in ourselves that we are thus or thus. Our bodies are our gardens, to the which our wills are gardeners. So that if we will plant nettles or sow lettuce, set hyssop and weed up thyme, supply it with one gender of herbs or distract it with many, either to have it sterile with idleness or manured with industry, why, the power and corrigible authority of this lies in our wills. If the balance of our lives had not one scale of reason to poise another of sensuality, the blood and baseness of our natures would conduct us to most preposterous conclusions. But we have reason to cool our raging motions, our carnal stings, our unbitted lusts, whereof I take this that you call love to be a sect or scion.
>
> (Act I, sc. iii)

> **イアーゴ：**どうしようもないとは笑わせるぜ。人間こうなるのも、ああなるのも、みんなおれたちの力だ。おれたちの体は庭だ、体の庭師は、いいか、意志だ。そこにい

らくさを育てようと、レタスを播こうと、ヒソップを植えて麝香草を引っこ抜こうと、ひとつ種類で通そうと、あれこれ植えて試そうと、怠けほうだいに荒らそうが、大事に肥やしをやって耕そうが、なあおい、庭の生殺与奪の権はおれたちの意志だ。人間の天秤、一方の皿には理性が載っててもう一方の皿には本能が載ってて、こいつがいったんバランスを崩してみろ、生まれついての卑しい血の欲のおかげでとんだぶざまな結果になる。さいわい理性が鎮座ましましてな、もぞもぞ、むくむく、びんびん猛り立つ情欲、性欲、肉欲をなんとか冷やして治めてくれる。お前の言ってる色恋なんてのは、その欲ってやつをちょいと切り取ったかわいい挿し穂ってとこだ[19]。

（第一幕第三場）

このセリフでは「理性」（reason）、「性欲」（lustなど）という表現を使い、理性によって性欲の暴走を抑えることができるとしており、まさに精神性と肉体性のバランスの重要性について語っているのである。

これまで見てきたように、詩人、美しい青年、ダークレディの三角関係は、善と悪、または精神性と肉体性の二項対立の文学的表現として解釈することもできる。ソネット144番でのこの三角関係を見た後にソネット18番を読み直せば、18番のもつ意味合いもまた変わって見えてくるだろう。単に詩人の同性愛的感情を書いているもの、というのではなく、詩人の「善」や「精神性」への憧れや熱望とも考えられるのかもしれない。ソネット18番は、『ソネット集』の中の他のソネットと併せて見ることでまた違った面が見えてくる、中身の豊かなテクストなのである。

Ⅴ．おわりに

英語文学で最も有名な文学者であるシェイクスピアは、劇作家としてとりあげられることが多く、詩人としての面は注目されることが少ない。英語文学の授業においても彼の劇しか取り上げられないことが多いが、彼のソネットは教材として使うのに適した様々な面をもっている。単に短くて読みやすいというだけでなく、詩の形式を勉強するにも、イギリスの気候やルネサンス精神、道徳劇、精神性と肉体性の二項対立といった英文学上の重要な事項を学ぶにも良いテクストだと言えるのである。

注

1　村松俊子『奇想の詩学：シェイクスピア『ソネット集』論』（東京：鷹書房弓プレス、2007年）、p. 10.
2　川崎寿彦『イギリス文学史』（東京：成美堂、1988年）、p. 182.
3　村松、p. 12.
4　同上、p. 11.

5　アクセントの置かれる母音だけが同じであったり、その母音は違ってもその後の母音や子音が同じであったりする場合は不完全韻と呼ばれ、完全ではないが韻を踏んでいると見なされることが多い。
6　川崎、P. 15の表を参考にした。
7　Shira Wolosky, *The Art of Poetry: How to Read a Poem* (Oxford: Oxford University Press, 2001), pp. 54-55.
8　William Shakespeare, *Shakespeare's Sonnets* (The Arden Shakespeare, 3rd series), ed. by Katherine Duncan-Jones (London: Bloomsbury Arden Shakespeare, 2010), p. 147.　以下、この本をアーデン版と称する。
9　ウィリアム・シェイクスピア著、小田島雄志訳『シェイクスピアのソネット』（東京：文芸春秋、2007年）、pp. 42-43の翻訳を使用。
10　橋口稔編『イギリス文化事典』（東京：大修館書店、2003年）、pp. 12-14.
11　Peter Stallybrass, "Editing as Cultural Formation", *Shakespeare's Sonnets: Critical Essays*, James Schiffer ed. (London: Garland Publishing, 2000), p. 76.
12　同上、p. 77.
13　『ソネット集』にはT. T（1609年に出版したThomas Thorpe）による献辞が付いているが、そこに「このソネット集の唯一の生みの親であるW. H氏へ」という言葉があり、そのW. H氏はサウサンプトン伯を指すのだという説が有力視されてきた。
14　アーデン版、p. 403.
15　小田島訳、pp. 294-295.
16　浜名恵美『ジェンダーの驚き――シェイクスピアとジェンダー――』（東京：日本図書センター、2004年）、p. 151.
17　アーデン版、p. 404.
18　同上、同ページ.
19　英文も翻訳も大場建治訳『研究社シェイクスピア選集10　オセロー』（東京：研究社、2008年）、pp. 64-67を使用。